

# おもろ座



おもろ座

Caption

1,2,3\_25年という節目を祝い演じられた「神楽式」。新年などの祝賀時以外では、なかなか見られない4,5,6,7\_今回は清和源氏発祥の地川西にちなみ「舟弁慶」が上演された。源平合戦の功労者、源義経は国を追われ西国へ向かう途中、静御前を都へ帰し海に出る。嵐の中、平家の怨霊が現れるが、弁慶の祈りの力に負けて退散する8\_当日は、日本の文化に親しんでもらおうと、市国際交流協会が外国人を招待している。伝統芸能に、まっすぐなまなざしを向ける

7



5

4

2

3

6

8

## 舟弁慶

清和源氏にまつわる舞

## 神楽式

節目を祝う神聖なる曲

重要無形文化財能楽総合保持者  
金春穂高

1

## 歴史を紡ぐ。

四半世紀かけて育てあげてきた文化  
煌々と燃える薪のそばには、常に人がいた

おもろ座は、その夜完成する10月1日、けやき坂中央公園に約500人が詰め掛けた。目当ては「川西おもろ座」(主催・川西おもろ座実行委員会)。今年、25回目の節目を迎えた。これまでの道のりは、決して平坦ではなかった。開催を断念しかけたのは、阪神・淡路大震災が発生した平成7年。大災害が川西のまちを襲った。地域の手によって生まれた貴重な文化を絶やしてはならない。そう考える住民に、能楽師で重要無形文化財能楽総合保持者の金春欽三氏は協力を惜しまなかった。

今や、川西の文化の象徴となったおもろ座。その影には住民の決意と支えがあったのだ。コミュニティ組織を中心として維持してきた実行委員会。立ち上げ時の住民の高齢化は否めない。開発から30年以上がたち、けやき坂地区は成熟期を迎える。かつて開発された住宅地と、今なお分譲される土地。多世代が生活を営んでいる。紡いできた歴史と文化。今、新たな力を必要としている。

おもろ座の端緒は大規模開発にある。昭和40年代から50年代にかけて始まった宅地造成。多田グリーンハイツ、大和団地、清和台などに続き、けやき坂地区でも進んだ。他の地域とは明らかに異なる特徴。それが「彫刻プロムナード」だ。随所に見られるミニチュメントの中心的存在が、けやき坂中央公園にある。石舞台おもろ座、世界的な彫刻家の流政之氏が作り上げた。新能が最大限に引き出す魅力。金春流を継ぐ穂高氏が舞う。華やかな舞台の傍らでは、住民が火を見守る。四半世紀、人は代わっても薪をくべ続けてきた。



11

12

10

9



14

16

Caption

9,10,11\_舞台の設営は、けやき坂地区のコミュニティ組織が協力して続けてきた。準備は3日以上前から始める。矢来垣を組むなど、使う場所に合う太さの竹を切りだす。竹は長いもので10m以上12\_火の粉からおもろ座を保護するため、かがり火をたく前には必ず土を敷く13\_舞台を照らすかがり火。薪をくべる担当がつき、本番中に火が絶えることは無い14\_当日は、地域住民の協力で、うどんなどの軽食が振る舞われる15,16\_能とともに日本文化を今に伝える茶道。若い世代に知ってもらふ貴重な機会となる。地元の中学生もお茶席で来場者をもてなす